老舗の街・尾張町シリーズ22

尾張町を支えた女たち その拾壱

どうせなら、ニッコリ笑顔で‥‥

表紙絵　　石野琇一(宝生流教授嘱託・石川郷土史学会)

目　次

はじめに …… 1

婿一人にトラック一杯の …… 2

近所付合いは家族のようにして …… 3

お姑さんには可愛がられたけど …… 5

市場組合のお世話か、店の仕事か …… 7

食べ物には困らんかった市場 …… 10

市媛さんと住吉さん …… 12

市媛神社の秋祭り大行灯 …… 15

三八の豪雪 …… 17

種は一粒万倍 …… 18

やっと大きな店が持てるようになって …… 19

「捨て育て」が当たり前の商売屋 …… 21

あとがき …… 25

はじめに

いつもは店先で挨拶をしていただけなのに、改まって聴き語りに伺うと、店の奥の静かな部屋に通される。そうしてまず、

「今日はお忙しいのに」

といいつつ、温かい緑茶と、半紙に載せたお茶菓子を出される。

店の忙しさは忙しさ、お客様のもてなしはもてなし。その時々の場合に合わせて振る舞う。何より、ここ金沢では、ことある毎にお茶から始まるようだ。今流行で、便利な缶入り清涼飲料水のたぐいは、こうしたおもてなしの場ではなかなか主役には程遠いのか。やっぱり毎日続けていると飽きてしまうせいかもしれん。

お客さんの合間を縫ってのちょっと一服は、何がなくてもまず温かいお茶。夏だからとか、冬だからとか、暑さ寒さにはあまりこだわらない。家の中では質素な商売屋では、番茶を飲むこともあるけれど、ちょっとした時にはお抹茶もたてる。そやさかい、お客さんとの一時には緑茶も自然に出てくるし、お抹茶だってごく普通に出される。

考えてみれば、普段当たり前と思うているけれど、まだまだ昔からの心持ちが多く残っている金沢だからのことなのかもしれない。合理的という美名の下で、たくさんの大事な物が捨て去られて来た。それ以上に、たくさんの貴重な“心”が捨て去られて来たことを忘れてはならない。

幸いにも、今回の聴き語りの媼は、ごく素直に「心持ち」を遺し伝えて来ていた。そうしたもてなしの心持ちに触れたときに、何かほっとしたものを感じるのは、私だけなのだろうか。

ともあれ、お茶飲み話の中で聞く話に、時代を超えた価値を見つけてもらえれば、一つの喜びです。特に今回は、尾張町の隣町・近江町市場で、ハツラツと商いし続けて来た媼の姿から、金沢らしい「生き生き」とした「粋」な姿を見て頂けることでしょう。

婿一人にトラック一杯の

私ゃ、本当に恵まれていたみたい。

あの終戦後の本当に何もないといっていい時代。物もないし、人もいないし、何から始めたら良いか分らんような毎日。体もそんなに丈夫でなく、病気がちな者をジャーマ(嫁)にしてくれる人なんておるんかしら。

ただでさえ戦争に男手を取られ、町ん中は年寄りと女子供だけという寂しさや。とりたてて何かをするでもなく、勤労奉仕で近くの工場で仕事をしている内に，気がついたら二十歳も越えてしもうてた。

“婿一人に、トラック一杯の女”

そんなことがいわれる程に、町の中を見回しても若い男手はおらんかった。世の中の色というもんが、賑やかな色から、白と黒だけのアイソムナサ(寂しさ)になってたというんか。

仲人から控え目に

「近江町の中に小さな店を持った大学出の人が帰って来たんやけど」

といわれたのが縁で、そのまますらすらと話がまとまったんや。醤油の醸造をしていた実家も、戦争で材料が手に入らず開店休業やったさかい、せめて同じ空気の商売屋へ嫁いだ方が良いと思ったんやね。確かあの年の暮れに、浅野川の尾山倶楽部が北国第一劇場に変わった昭和25年の春のことやったと覚えとる。

最初の頃は、歳が十も離れているのに、二人並ぶと私より若く見えてしまう内の人には困ってしもうた。人様に外見のことを言われると、内の人は黙って苦笑いしてしまうだけ。でも、女の私にとっては大問題。やっぱり、娘時代にどうしても、ということ以外は家の中に篭っていたのがたたって、地味に見えてしまうんかしら。

でも、私にだって何か出来ることはあるはず。内の人みたいに頭は良くなくたって、嫁いで来た“ここを”好きになろうとしている気持ちはあるんだし。

近所付合いは家族のようにして

内気な私にとって、この近江町市場というのは、ぐずぐずしている暇もない処や。朝は３時ごろから荷が集まり出し、魚の木箱の手カギを打つ音、人より少しでも良い物を手に入れようとするために喧嘩をする人のわめき声。朝一番の勝負の活気が溢れて、眠っておれたもんやない。

昼は昼で、いったいどこからこんなに人が集まってくるんやろ。とにかく、小さな台の上に置いた品物が次々と売れ、お客さんの応対をしているだけでもキリキリ舞い。奥の家事をするか、店の物売りをするか、どっちもハンチャボ(中途半端)の内に一日が終わってしまう。

ご飯も落ち着いて食べとることも出来んし。商品を置いて倉庫以外は、何せ狭い所に、店先と猫の額のような台所、三畳ほどの部屋がひしめき合っている。どこもかしこも、風通しが良すぎる程に筒抜けや。

「こんにちは〜。ちょっと、これ幾ら」

あ、はぁ〜い。やっとちゃぶ台の前に座ってご飯を食べ出したのもそっちのけ。それこそ、一足で店先に出て、「まいどあり〜」

本当に座っている暇もないくらい、ほとんど立ちっぱなしのようなもの。いつの間にか、じっとしているよりも何かしら体を動かし続けることの方が普通になってしもうた。

「らっしゃい、らっしゃい」

“いらっしゃいませ”なんて、悠長に喋ってられない。隣近所の、魚屋さんや八百屋さんの威勢のいい声を聞いていると、こっちも声をだんだん張り上げている。

「オカッツァン(若い女将)、今日も元気な声、出しとるがいね」

なんて言われてみて、あれっ、私は病気がちやったんだったっけ。と、娘時代のことを忘れかけているのを思い出す始末。いつの間にか、私も“ここ”の住人として、皆んなに認められたんかしら。

ぎこちなく、お礼のおじぎをすると

「おっ、いい笑顔しとるねェ」

と、おだてられたのか、褒められたのか。こんな挨拶を聞きながら、そっと顔に手を当ててみると、一日中お客さん相手にニッコリしていたためか、顔がつるつるとしている。笑顔が美容に一番なのかしら。

そういえば、言葉使いは荒っぽいけど、心持ちの良い人ばっかり。ちょっと分らんことがあったりすれば、そっと教えてくれたり。どうしても手が離せない時なんか、お隣さんがお客さんの応対をしてくれ、ちゃんとお金までもらってくれたり。

種物という商売柄、季節の巡り合わせが悪いとお客さんが少なくて、今日の売上げどうなるんやろ、と心配する程暇になっている時など、

「おう、これもらっとくよ。ほたら、お代もな」

あれっ、今のは確か向いで商売している人でなかったかしら。

後になって気がついてみると、杓子定規な付合いでなくって、こころの中が暖ったかくなるような。店番は、お姑さんと私だけの女所帯のようやったけど、この市場全体がお互いを助け合うような感じやったのが、私をますます“ここ”を好きにさせて、“一所懸命”に頑張らせたみたいや。

お姑さんには可愛がられたけど

お姑さんとの仲違いの話はよう聞くけれど、私はあんまし苦労はせんかった。お姑さんの昔の頃は、ほとんど女手ひとつで店を切り盛りさせられて、苦労したらしいし。息子の嫁も、似たような境遇になっているので、こころを同じくしたのやろか。何せ、どうして男の人というもんは、内の中のことを放り出して、揃って外へ外へと出て行きたがるんやろ。

お蔭で世間様とここの家とは大違い。いろんな発明や工夫をすることを生き甲斐にしてたオアンサン(主人)を、思う存分好きにさせるために自分が身を粉にして働いて来たお姑さん。

「そやかて、私の大事なオアンサンなのよ」

勿論、そんな言葉は聞いたことはないけど、何んや黙っていても私にだけは聞こえるみたい。外から見た形は、滅私奉公みたいやけど、こころの中はそれなりに楽しかったんやろね、お姑さん。

確かに、せっかく生まれた息子も、学校を出てすぐ東京の会社へ勤めてしまって、最初は店には帰らずじまい。あげくの果てに、大雪の降った昭和15年に赤紙(召集令状)が来て、戦地満州へ行かされてしまうし。

戦争が激しくなって、金石の涛々園が閉鎖になった昭和18年には、大事な大事な旦那さんが病気で亡くなるし。せめてもの息子は、終戦になってもソ連へ抑留されてしもうたまま。

周りから、女ひとりやとメト(軽んじる)にされては、とそれこそ一所懸命やったらしい。今の武蔵の交差点の前の所の納屋に住まいして、毎朝リヤカーに種物を積んで、近江町に出て商売していたとか。

せめて息子が帰るまで何とか！

お父さんが亡くなったからには、きっとあの子がこの店を何とかしてくれるはず。女一人の力ではいつまでも持たないけれど、もう少し辛抱すれば帰って来てくれるのやから。

そう信じているのに、終戦の前日には、武蔵の百貨店のために周囲を空けるように言われ、強制立ち退きをさせられるし。もう、話を聞くとさんざんな目に合っているのに、よくもまあ、と感心させられる。

ちまたで、浅野川界隈の名物オカッツァンの一人が、私の家のお姑さんと、尾張町の合羽屋のオカッツァンやというのも、うなづける。口に出して言うてるよりも、まず自分が体を動かす。これだけは、私もしっかりと宝物として引き継がせてもろうたし。感謝せなならんのは、娘時代の病弱な体も、いつの間にか、綺麗さっぱりと吹き飛んでしもうたこと。

やっと息子が内地に戻ったのは、昭和も22年の暮れになってからとか。

何にも無い無い尽くしの中で、内の人は元の東京の会社員になるよりも、親爺さんの仕事を継ぐ決心をしたらしい。一旦こうと決めたら、後の動きの早いのはやっぱり男の人。女の私が聞いていても、小気味の良さったらありゃしない。

まず、せっかく近江町の種屋としての評判があるのやから、市場の中で店を探したこと。ここで店を構えるからには、地元の人で、自分の母親を大事にしてくれる人を嫁さんにすること。

テキパキした行動力は、お姑さんのそれまでの辛抱を一気に吹き飛ばすものやったんやろ。

市場組合のお世話か、店の仕事か

私がこの店に嫁いだのは、そんなころ。内の人が店の仕事に対して前向きに働いている姿には、ほれぼれしたもんや。いいオアンサン(主人)に恵まれたし、お姑さんは嫁の立場をようく分ってくれるし。

ところが、やっぱ父親の血を引いているんかね。内の人のやることなすことが、みんな外へ外へと目が向いて行く。

そうなんや、頭の回転の早い内の人やから、仕入れとかはしてくれるんやけど、忙しい昼間はとんと店にいてくれんのや。手早く自分のすることを済ますと、

「ちょっと、市場の組合事務所へ行ってくる‥‥」

と、出掛けたきり、昼御飯になっても帰らんし。もう、なしのつぶて。一体何をしてんのやろ。そりゃ、主計町や東の茶屋街へ、夜ごとに出掛けてチントンシャンとしているよりはましやけど。

食べる暇もないくらいにテンテコマイの時なんか、

「ああ今、店におってくれたら、どんなに助かるんやけど」

と、思ったりしたことか。

でも、呼んでもすぐ答えられる所には居らんのやし。今ごろは、市場組合の寄りで何か大事なことを決めているんやろうけど。そんな人様のお世話をするのに、何んで内の人ばかりがアクセクせないかんのかしら。この市場には、まだまだ他にたくさんの人が居るはずなのに。

自分が好きやから、ついつい顔を出して、にっちもさっちも行かない位に首

を突っ込んでしまうのじゃないかしら。そりゃ、確かに内の人が戦地から帰って来た昭和22年からこっち、隣には尾張町振興会が出来るし、近江町市場自治協会が出来るし。翌年には、露店商の組合からも出て、どんどん市場も様変わりし出した頃やった。戦争が無くなったからには、いち早く商売の活気を早く取り戻したいという気持ちは分るんやけど。

そやけど、何回も言って愚痴になるけど、内の人ばかりが市場全体のことに何んでそこまで構うの。いつも優しい人なのに、そんな時には頑固になってしまう。

お姑さんから、

「男さんはね、あんたが店を守ってくれているっちゅう安心感があるから、ああして外へ出て行けるんよ。決して自分の道楽で店を空けるんでなし。大きなことのお世話をしているんやから」

まあ、自分のことばかり考えて商売するよりも、人様のお世話を通じて仕事が回って来るほうが良いのかもしれん。自分の損得ばかり考えていたら、こんな日中未亡人の店に、隣近所の店が助けてくれる訳がない。この市場のほとんどの人が、商いは目先だけでないことを体で感じ取っているみたい。

勿論、金沢の人の台所として、新鮮で良い品物を少しでも安く売るのは、私らの当然のことやし。それを当てにして来てくれるお客さんの望みに答えるような品揃えをしてるからこそ、こんなに人が集まって来てくれるんやから、ありがたいことや。

隣の老舗が並ぶ尾張町にしたって、そんな目で見てみると、やたら赤札ばかり貼って売り出しをするでもない。ちょっと見には悠長に見える商売をしているけど、ただ売れれば良いという商売でなく、人様のお役に立つことを第一にしているからなのかしら。

それが回り巡って、お世話をした人が、いつかはお客さんとしての商売につながる‥‥。息の長い商いをすることが、店そのものも長続きさせることになるんやね。せやけど、必ずお客さんになってくれるということもないし、仮になってもらっても、自分の代じゃなくって子供や孫の代のこともある。見返り

を当てにするよりも、世の中の役に立つようにお世話することが、金銭で計り知れない店の信用になるんやろか。

この前、尾張町の時計屋さんで

「家のお婆ちゃんが嫁いだ時に、ここの婚約指輪をしたのが良かったと聞いたので、私らのもお願いに来た」

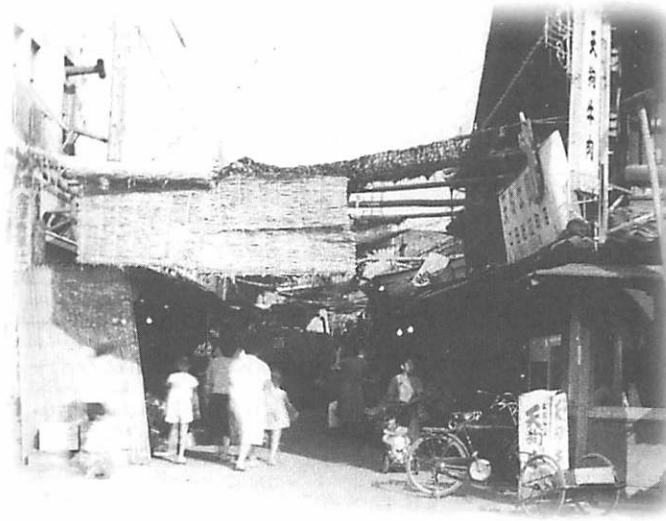
と、いうお客さんがあったそうな。

やっぱ、単純に思う女の立場と、男さんの立場とは違うみたい。お姑さんて、だてに歳をとっているだけやないのや。先の先まで、中の中まで分った上で、嫁の立場を理解してくれとったみたい。

食べ物には困らんかった市場

内の人でのうても、男さんが何んであんなに一所懸命にしてたか、市場で商売している者なら、だいたい分ると思う。兎に角、戦争が終ってすぐで何も無いけど市場へ行けば、何かは手に入る。物を探して、金沢中の人が、もっと遠い所の人も、あきれる程にたくさんの人が集まって来てた。

店先に並べさえすれば、何んでも売れる。それこそ猫の死骸でも、並べておけば売れたというくらい。天井に葦簀(よしず)を張った店が並び、裸電球が狭い通りと人でごった返す薄暗い中で、妙にカガカガ(ギラギラ)に光っている‥‥。一時は、闇市みたいなもんやった。でも、これがいつまでも続くはずがない。世の中が落ち着いて来た時には、もっとちゃんとした市場の形を作らないかん、ということは誰もが思うとった。



ただ、誰がその音頭をとって行くんか。毎日の仕事に追われていて、そこまで手が回らん。いきおい、時間の取れる限られた人が、市場組合を中心にして動いて行くことになるんやけど。内の人に限っていえば、そんなに時間に恵まれている立場でなかったはず。

まして肌で世の中を渡っている人達の間で、学者肌の内の人が、ようも気が合うていたものや。大きなだみ声の中で、一人穏やかな話し声は、もしかした

らかえって説得力があったんかもしれんけど。

考えてみれば、結構背丈もあったし。それなりの押し出しの格好はついとったのやから。ここが市場で、世間様と違うて、食べ物だけは不自由せんかったことも、がっしりした体を保っているのに役立っていたのやろう。

店の仕事が一段落するころ、

「おつかれさん、今日もあんやとさん」

薄暗くなった店先に、背の高い影が立つと、一日の疲れも吹っ飛んでほっとする。何んやかんや、自分では文句の一杯も言っていたのが嘘みたい。まあ、こんな風なことに心配をしてられるのも、食べ物に不自由せんお蔭やろかしら。だって、誰も彼もが食べ物を手に入れるのに精一杯。他のことは考えられん時代やったのやし。

ここ市場は、食べ物を売っている所だけに、そんな心配だけはなかったと言えば、世間一般の人に申し訳ないことをしてるみたい。けど、決して自分らだけで独り占めするなんて、もうとう考えたこともない。万が一にもそんなことをしたら、何んのための市場か分らんがになってしもう。人様に、というかお客様に在るだけのものを出し惜しみすることなく、店先に出せる限りの物は、あらいざらい出して商売せんかったら、お天道様にバチが当たる。

そやけど、そこら辺を探してみれば、何か残り物はあったさかい。それが私らの毎日には欠かせんものとなったことも、本当のことや。いきおい、考えることは世間一般の人のように“まず食べること”でのうて、もっと違うところに向けられるのは仕方のないことかもしれん。

市媛さんと住吉さん

金沢って呼ばれる難しい由来は時々聞くけど、そんなことより私らにとって大事なのは、やっぱり市が立って人が集まったことで、この町が出来たということや。いろんな人が、それぞれに要るものを持ち寄って交換する。いうてみたら、人様の役に立つようにと願って商売していることの、もっともっと素朴な形みたいなもの。

市場の古老に聞いてみると、今市とか、山崎村凹市(くぼいち)とかいうもんが大昔このあたりにあったそうな。今市は、あの一向一揆の頃の尾山八町の中にあって、今の近江町の元になったというし。凹市は、新町から尾張町・橋場町の懸造り(かけづくり)の付近にあったとかいうし。何せ、びっくりするような歴史を持つ処や。

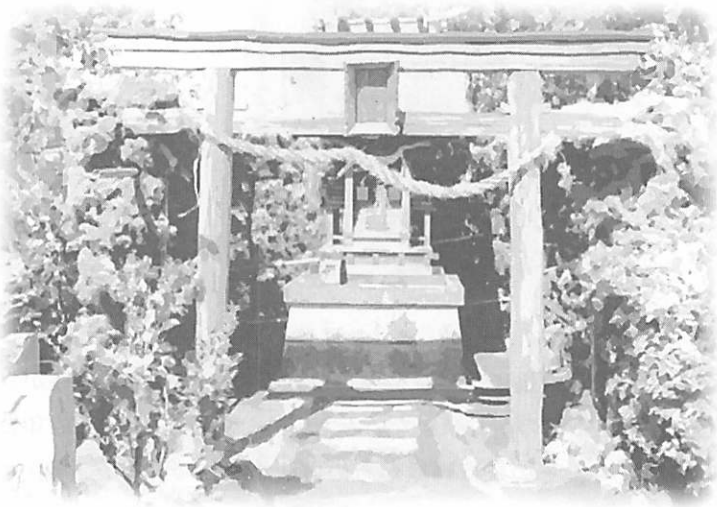
武蔵の交差点の入口の処に『官許金澤青草辻市場』と書いた木柱が立っているのも、そんじょそこらの謂れじゃないみたいやし。確か、明治37年に近江町一帯が大火事になり、その焼け野原からの再興を願って作ったと聞いている。今の市媛通りが出来たのも、その火事を機会にしてのこととか。武蔵ケ辻が四辻の交差点になったのも、あの頃からやったと教えられているし。

慶長年間に京都五条の市媛神にこちらに来てもらって建てた市媛神社も、この火事のお陰でやっと今の場所に落ち着けたみたいや。それまでは“市媛”の

名が付くように市場とは深い関わりを持つ守護神みたいなもんやった割には、遠く卯辰山に場所を移されていたんやて。近江商人の中立ちがあったので近江町市場の由来になっただけに、上近江町と下近江町の氏子は、その間も離れているというても崇拝を怠らなかったとか。

何んや前田のお殿さまでは、一向一揆で騒いだ浄土真宗のお寺をまず身近で見張り。犀川の向うの寺町には徳川家の宗派の日蓮宗のお寺を中心に集めて、福井の松平家が攻めて来にくいようにし。卯辰山とか浅野川の向うには、武士の信者が多かった禅宗や、一般の神社などを置いたのも、富山は同じ前田の一族やからということらしい。

やっと明治になってから戻ってこれたと思ったのも束の間、先の火事で市場の店と一緒になって燃えてしもうて、本当にきっちりと再建されたのは市電が通り出した大正８年まで待たなならんかった。



もう一つ市場に関わりのある神社いうたら、大通りの向こう側の石屋小路にあった青果卸し商が集まっていた住吉市場の守り神の住吉神社かしら。中央市

場の完成やら、昭和44年の名鉄丸越百貨店の開店やらで、随分と町の様子が変わってしもうて、今は百貨店の屋上に静かに鎮座しているけど。

市媛神社の秋祭り大行灯

やっぱり、近江町の秋のお祭りいうたら市媛さんかしら。上近江町と下近江町が競い合って、大行灯を掛けるんや。昔は浮世絵や歌舞伎の一こまを描いてたりしてたというし、近くでは「忠臣蔵七段目」や「壽三番叟」なんてのもあったし。

何というても、この大きな行灯に明かりを灯すと、市場中が明々として、夜遅くなっても人通りが絶えなくて賑やかやったのには、ちょっと戸惑わされた。だって、市場は朝がどんなに早くても不思議ではないけど、その分夜は皆んな早かったさかい。

近江町の夜は静かなもの。この市場に嫁いで来てからず〜っとそう思ってい

たのに、この秋祭りの時期だけは、落ち着いてよう寝れんのになる。けど、この年になってもまだ娘ごころの抜けん私には、何か浮き浮きして来るのも押さえることが出来んかった。

ちょっと市場の中を歩き回ると、大行灯の向うに仮舞台が設けられ、明かりの中でよ～く顔を見れば近所の旦那さんが浄瑠璃を唸っていたりする。

「へえ～、あの人がねえ」

日ごろ、客引きの“だみ声”ばかり発している姿からは、想像もできん。意外な思いをしながらも、いつの間にか聞きほれている。商売に熱心なほど、また芸事も熱心なんやね。というか、商売があるから芸事が出来るっちゅうんか。芸事で身を立てている玄人と違うて、その辺の依って立つ処が別なんやけど。

同じことは、隣町の尾張町の老舗の旦那衆にもいえるみたい。そりゃ、やるからには中途半端でなくって、清元やら謡、お茶の免状を持ってはいるけど、決して商売をおろそかにしていない。私も最近、お花の免状を取ったけど、そ

れで生計を立てるつもりは毛頭ないし。

そんなお祭り風情も、今は懐かしい思い出になってしもうた。車が町中に氾濫して、危ないということで昭和30年ごろに姿を消すことになったのが残念や。かろうじて市媛神社の大鳥居だけが、再建するときに氏子の市場の人たちがこだわった伝統的な形をして残っているのが面影を遺すだけ。

三八の豪雪

年末に雪が降らない年っていうのは案外に注意がいるっちゅうのはあの年みたい。昭和38年の年が明けてからのことやった。1月も10日過ぎになってから降りやまない雪が金沢を真っ白にしたのは。毎日毎日、これでもかこれでもかという具合に降り、白以外の色は全部塗りつぶされてしまうような感じやった。雪掻きなんて間に合うはずもないし、屋根雪なんかコンモリと積もって、家中ミシッミシッという冷たい音が響き出す始末。

1メートルもあっという間に積もり、やがて2メートルになろうかとする時に被害は現れ出した。4年前に完成したばかりの横安江町の鉄骨のアーケードが50メートルに渡って潰れてしもうたんや。幸いにけが人もなく、物だけですんだのは不幸中の幸いとでもいうんか。続いて大手町スポーツセンターの屋根が落ちたと聞いて、尋常なことやないと思わされた。

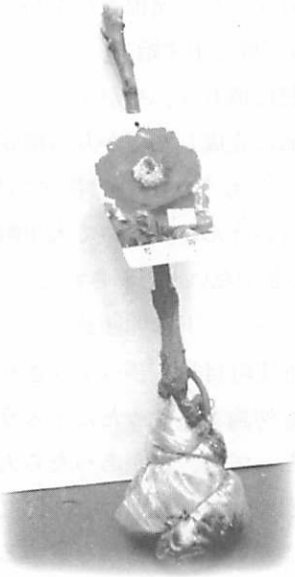
ところが、ここ近江町のアーケードは開閉式のテントだったので、何にも被害がなかったのには、当の近江町自身もびっくりさせられた。昭和31年に完成したばかりで骨組みの鉄骨も勿論丈夫やったんやろうけど。なにより、組合のお世話をしていた内の人にとっては、何かあったら人身事故になると考え、その対策に頭を悩ませていただけに、ほっとしたこともひとしおやったはず。

やっぱり、妙に正面切ってガチガチに物事を進めるよりも、一歩下がって柔軟に、女のように柔らかくした方が良い場合もあるんやね。今回で分ったように、テントというもんは、普通の建築物のように固いもので作られているんでなくって、根本は柔らかい布やからこそ、柳のように雪を受け流して、何の被害も出さんかったのではないんかしら。

種は一粒万倍

種物や花の商売というもんは、店先ではすぐに良し悪しが見えて来んだけに信用が人一倍に大事になってくる。変な種を目先だけで売ってしまうと、後で芽が出た時にお客さんに怒られてしまう。

お姑さんに教えてもらった、種の蒔き方・育て方を今度はお客さんに説明して、しっかり薦められる種を売る。だって必ず、後になって土の中から出てくる芽を見れば、すぐ良いか悪いかの結果が分るだけに。怪しげな、値段だけの変なものは絶対に売れない。良いものを売り続ければ、それこそ“種は一粒万倍”にもなって返ってくるはずなのやから。



口では簡単そうに思えるけど、種という生き物が相手だけに、簡単な訳にはいかんことをすぐ思い知らされた。こっちの種は春に蒔くけど、あっちの種は

冬に入る前にしなけりゃいけない。肥料のやり方にもコツがあり、ただやるだけでは駄目。少しずつ時間を置いてやる種、最初にしたら後は良い種、ほとんどやらなくて良いもの。土の種類を選ぶもの。

まるで我が侭な子供みたい。ええい、もう面倒臭い！なんて放り出してしまったら、それこそ何をしてるか分らんことになってしまう。じっと辛抱するっちゅうんか、女であること母親であることを思い起こし、優しく包み込むような気持ちにならんといかんみたい。

いうたら、商売そのものが生き物みたいなんや。でも、誠心誠意という芯を持ってないと素直には育たない。人様が見てないだろうと、蔭で妙なことをしていても、結局は誰かに何処かで見られているもの。やっぱ、お天道様の下を背を伸ばして歩く商売をすることが一番なのやろ。

私らが、ほんの店先の商いで思うていることを、ふと気づいてみると、内の人は市場組合という公のことを通して、もっと広く実行しているんでないかしら。それも自分だけの欲得にこだわらないだけ、尚更一層に。

回り道をしてもいい、下手でもいい。今は小さな店だけど、正直な商売をしてさえいれば、いつかは大きな店を持てるはず。皆んなで励まし合ってると、毎日の商いが楽しくなってくるから不思議なもの。流れる汗も黄金色ちゅうたら、少し言いすぎかしら。

やっと大きな店を持てるようになって

ちょうど今の場所の建物が売りに出されたのをキッカケに、お姑さんと内の人、四人に増えた子供たちと一緒に移ってきた。元は旅館だった家だっただけに、部屋数が17か18もあり、子供たちは大喜び。雨が降っても、家の中だけで充分に遊び回れるのやから。私にしたって、これまで鏡台や箪笥を倉庫に入れて、ほとんど使えなかったのがやっと陽の目を見ることが出来るようになってほっとさせられた。

これまでと違って、一階を全部店に使っても、まだまだ部屋がたくさんあり、一人一部屋ずつ持っても余ってくる始末。どうしようかしら、突然の贅沢に戸

惑うてみたり。ただ、何かあるときは、今までみたいに一足飛びという訳に行かず、廊下をちょっと走り回らなければいかんのにはなったけど。

市場の中の店はそのままにして、別にここを本店にしたのやけど、たちまち翌昭和41年には完成した中央市場へも店を出すことになった。今まであった卸の店がほとんど向うへ行って、あっちにも商売の窓口を持たんといかんようになったから。こちらは小売りの店が中心になって、市場もちょっと様変わりしてきた。

昔のように朝の2時3時からのセリがなくなった分だけ、朝方の静かさはあるようになったし。年中、休みのないのが当然だったのに、少しずつ休む日を持つ店が増え出した。商売する時間も、お客さんがいる間はいつまでも開いているのでなくて、始まりと終りの時間もだんだん決まって行った。

商品の値段も、お客さんとの駆け引きの中で決めていたのが、きちんと価格を出すようにし始めたし。値切るのが当たり前という常連のお客さんからいえば、少し物足りないような。それでも、

「夕方や、だんだん下がる乳母の月給じゃ」

なんて、半分訳の分らんことをいうて、その日の商品を売り尽くすために安売りが始まったりする。またそれを目当てに、薄暗くなってからしか買いに来ないお客さんもいるけど、これは買う呼吸を間違えると欲しい物が売れてしまっていることになる。いわば、半分“通”の買い方やね。

市場の組合員も同じような立場の店になったので、かえってまとまりが良くなったようにも見える。そうや、自治協会いうてたのも、家を移した年に振興組合にしたんやったし。

終戦後からこっち、やっきになって商売を手伝っていたけど、何んやあの頃になっていろんなことが続いたみたい。長い間慣れ親しんでいた市電も、いよいよバスになるっちゅうて“さよなら花電車”が走ったのも、昭和４２年の２月のことやったし、この年の秋には中央市場に続いて問屋団地が完成して、隣の尾張町から卸の店がごっそり抜けてしもうたんやった。

一段落して新しい時代が始まるような感じのとどめは、昭和45年の町名の統合やった。このあたり一体が、老舗の並ぶ尾張町の名前になり、市場の一部も尾張町二丁目という、使い慣れない名前になったことかしら。格式のありすぎる名前で、ちょっと戸惑うたのも確かやった。それにしても一丁目、二丁目なんてのは味わいがないような。と思っていたら、郷土史家の人から

「お城に近い方から一丁目、二丁目となっている。ただし、寺町だけはお殿様のお墓のある方から付けられているので、逆になっている」

と聞かされて、やっぱり金沢らしいんやなあ、と感心させられたり。

でも、皆んなはやっぱり、昔から使い慣れている、通称“近江町市場”で通しているけど。

「捨て育て」が当たり前の商売屋

今は、子供の教育に学校の先生がどうの、親やＰＴＡがどうのこうのと賑やかなことや。そりゃ、自分たちの後を引き継ぐ、これからの時代を作って行ってもらわなならんから大事なのは分る。分るけど、あそこまで回り中が寄って

たかって騒ぐほどのものかしら。

肝心なのは、何のために勉強するかってこと。ただ、やたらに何でもかんでも覚え込ますだけ覚えさせ、一人でも多く良い学校へ入学させるだけでは、その場しのぎみたいやし。もし、そんだけのことやったら、世の中つまらんことになってしまう。

やっぱり、勉強したことを後生大事に自分の頭の中にしまって置くだけでのうて、それを世の中のために使うのが大事なんかしら。自分のためだけの欲得ばっかりでなくって。

お姑さんからも、商売屋にとって大事なのは、“知識”でなくって『知恵』なんや。知恵を生かすために、常識という知識があったら、尚鬼に金棒やけど、どっちが大事かという順番を間違えんように言われたし。

なんせ、商売屋にとっては、子供の面倒を見ている暇なんてある訳がない。反対に、子供は親が店で忙しいのを見ていると、やっぱり何か手伝わないといけないような気持になるみたい。年に合うたように、ちょっとした品物をあっちへ持って行ったり、こっちへ持って来たりとか、簡単な手伝いが随分と助かることもあった。

もともと「捨て育て」といっても、放ったらかしたり、無関心でいる訳やなし。見てないようでいて、大事なところでは見ていたし。要は、あんまし干渉しすぎないということなんやけど。何より、店と家の中が一緒になっているようなために、いつでも親子が顔を会わせられていたことが、離れているようでいて、心は通じていたみたい。

私ゃ口下手やから、子供たちの前では面と向かってよう言わんかったし。内の人も、そんなにはっきりと店を継ぐことを子供たちに言ったことがないように思う。

けども、こころの中では、苦労はあるけどやりがいのある今の商売を継いでもらいたいと願うているわけ。だって商いの基本は続くこと、続けること、人様のお役に立ち続けて行くことなんやから。それもこれも、店を通じて直にお客さんとふれあうからこそのこと。

ここからここまでが自分の仕事の範囲で、それさえ済ませれば後は他の人の仕事で、自分は知らない。という生活は、合理的で格好良くても、私らにゃ、後に何も残らんでアイソムナイ。

というて、上から子供に無理強いして言うもんではないみたい。毎日が本当に忙しゅうて忙しゅうて、どこまでが店のことで、どこからが家の中のことか分らん生活をしていて、休まる暇がない。売らなならん、仕入れなならん、配達もせなならん、帳簿もつけなならん、何もかもせなならん。お客さんになる人だけでなく、回り中の人に、それこそのべつまくなく頭を下げている様子を見ているだけでは、子供にとってつまらんように映るかもしれん。

あれもこれも、やっぱり最後は、ほとんど全部を自分がしょいこんでしまう。そりゃ、しんどいかもしれんけど、私がやっている‥‥。この肌に感じる、何ともいえん爽快な気持ちは、四六時中体を動かし続けている者でないと分りにくいかも知れん。

何も特別に話さなくても、子供たちは私らのしていることを分っているはず。黙っていても、ちゃんと後を引き受けて、続けてくれる。“信じる”ということが、毎日の商売の支えになっているんやろね。

ある日(昭和57年ころ)、気がついたら、息子が横に並んで

「らっしゃい、らっしゃい」

と叫んでいた。別段とりたてて言い訳をするでもなく、まるで当たり前のように‥‥。

成瀬外志子・媼(おうな)について

大正十四年八月五日生。第二次大戦後の混乱の中で結婚し、街作り・市場作りに励む夫と理解あるお姑さんとの間をとりもって店を支える。何よりも、その笑顔が店の繁栄を引き寄せる。

あとがき

今、近江町市場のアーケードに掛かるテントが張り替えられている。平成元年以来の化粧直しとでもいうのか。緑色がかったアーケードの光の色が、順番にオレンジ色の明るく華やかな光に変わり出している。

市場通りを歩いているだけでは気が付かないけれど、上からこのテントに沿って通りをなぞって見ると、“女”という形になっているのに気付くはず。特に今回のテントが、紅を塗ったように女っぽい色になっていることは象徴的な気がする。

日々の新鮮な素材を安く提供する市場では、そこで商いする人の活気が大きな景気付けになっている。勢い、大声での客引きの声、そうしてこの目でしっかりと仕入れた自慢の商品を手にかざして見てもらう。お客も心得たもので、駆け引きを言い出し、なかなか値札通りには価格が通らないこともある。

一見、男でなければ出来ない荒っぽさを感じる。けれど、強さを支える弱さ、固さを支える柔らかさ、逞しさを支える優しさがあってこそのものだということを忘れてはならないようだ。

隣町である私達の尾張町も、商売のやり方は違っても、同じ商人としての“こころ粋”を持っているからこそ、老舗と名前が付く店が代々に渡って続いて来ているのだろうし。それを自分で意識している場合も、また意識していなくても誰かが(大事なオカッツァンが)バランスを取って来てくれていたといえる。

今回の近江町の場合は、それを支えているのはオカッツァンである女の人であることを忘れてはいけない。として、分る人には分るようにと、誰が作ったのではないのに、通りが自然に“女”の形をしているのかもしれない。

商いが“人と人を幸せにするためにお世話することから始まっている”とされているなら、“こころ一杯のお世話”が今のこの時代からこそ一層必要だといえる。“こころ一杯のお世話”は、店の顔を代表する男だけでなく、日向を支える内助の功としての“女のこころ”が相まってこそ、より充実したものになることを再確認されたことに感謝したい。

今後も、尾張町小冊子を宜しくお引き立て願います。

《さし絵の説明》

項　　目	内　　容
○表 紙	「官許青草辻の木柱」
<目 次>	
○近所付合いは家族のようにして	「市場の雑踏風情」
	「吊り銭箆」
○お姑さんには可愛がられたけど	「武蔵から市媛通り」
○市場組合のお世話か、店の仕事か	「市場事務所風景」
	「裸電球」
○食べ物には困らんかった市場	「屋根にムシロを張った昔の市場」 (近江町市場商店街振興組合資料)
○市媛さんと住吉さん	「官許青草辻の木柱」
	「住吉神社」
○市媛神社の秋祭り大行灯	「大行灯の絵柄」 (近江町市場商店街振興組合資料)
	「市媛神社の鳥居」
○種は一粒万倍	「牡丹の苗」
○やっと大きな店が持てるようになって	「店先の様子」
○「捨て育て」が当たり前の商売屋	「近江町のロゴ」 (近江町市場商店街振興組合資料)

発　行＝１９９７年10月吉日
著　者＝石野　琇一
さし絵＝石野　琇一
発行所＝金沢市尾張町１丁目１１番８号
尾張町商店街振興組合
尾張町若手会